

(第1号様式)

プロジェクト登録申請書兼Jブルークレジット[®]認証申請書

2025年01月17日

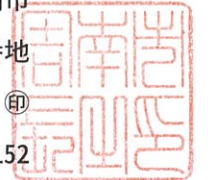
ジャパンプルーエコノミー技術研究組合 御中

(代表申請者) 周南市

住所：山口県周南市岐山通1丁目1番地

氏名：市長 藤井律子 印

法人番号：4000020352152



(共同申請者) 山口県漁業協同組合周南統括 支店

住所：山口県周南市築港町11-17

氏名：運営委員長 西村 幹男 印

法人番号：4250005004158



(共同申請者) 大島干潟を育てる会

住所：山口県周南市大字大島910-1(山口様方)

氏名：会長 永濱 一臣 印



(共同申請者) 戸田地域干潟保全グループ

住所：山口県周南市戸田桑原585-4

氏名：戸田支店運営委員長 村瀬 稔 印



Jブルークレジット制度実施要領の規程に基づき、次のとおりプロジェクト登録兼クレジットの認証を申請します。

プロジェクト番号	新規申請
プロジェクト名称	大島干潟から、つながる周南市ブルーカーボンプロジェクト in 徳山下松港

プロジェクト区分 (複数選択可)	人工基盤 吸収源の新たな創出 吸収源の回復、維持、劣化抑制
プロジェクト情報	<p>大島干潟は、徳山下松港で発生した浚渫土砂を活用して国が平成15～平成29年度に整備され、その後地元周南市が管理する約29haの人工干潟である。</p> <p>大島地区では、干潟造成によりアマモ場等の生育環境が整備されたことに加えて、月1～2回の定期的な保全活動等に取り組んだ結果、アマモ場、コアマモ場といったブルーカーボン生態系の維持・拡大によって、生物多様性の向上やCO2吸収源拡大による地球温暖化の抑制に貢献している。</p> <p>大島干潟における干潟保全活動の経緯は以下のとおりである。 平成29年11月、山口県漁業協同組合周南統括支店（以下、漁協）に所属する漁業者と大島地区住民の参加・協働により貴重な地域資源である干潟を活用した地域の活性化を目指して「大島干潟を育てる会」（以下、育てる会）を設立し、大島干潟の保全活動を開始した。</p> <p>漁協は、漁業権が設定されている干潟を含む海域での活動について、同年支店組合員会議に諮り許可するとともに、育てる会が行うアサリ資源の増殖・保全活動に対して放流用のアサリ稚貝の提供、モニタリング時の備船、活動への助言・協力をしている。さらに平成30年度からナマコ桁網によるアマモの刈り取りが行われないように一部を禁漁区にする等してアマモ場の保全を行っている。</p> <p>育てる会は、アサリ資源の保全や増殖活動、同干潟内のアマモ場・コアマモ場の保全のほか、国・周南市が連携して毎年実施する環境学習活動の支援を行っている。</p> <p>さらに、戸田地区の西津木干潟では干潟保全活動を平成25年度から実施しているほか、平成28年度からナマコ桁網によるアマモの刈り取りが行われないようにアマモ場保全ため津木漁港の一部を禁漁区にする等してアマモの保全を行っている。</p> <p>周南市は、干潟の管理者として育てる会の活動を支援し、平成30年度に資材等（被覆網、熊手、ピブス、倉庫）の提供や活動会員用の駐車場（借地）の確保及びオブザーバーとして毎月の会の保全活動に参加しているほか、ドローンや船舶によるアマモ場やコアマモ場のモニタリングを実施している。さらに、令和4年度からブルーカーボン推進事業を立ち上げ、大島干潟を含む周南市エリアでのブルーカーボン拡大のためアマモの花枝採取を実施、播種等を実施している。</p> <p>また、令和6年度からは戸田地区での干潟保全活動を実施している漁業者を中心として、津木漁港でもアマモの花枝採取を実施、播種を予定している。</p> <p>以上のように、大島干潟や戸田地区での活動は、今後も継続的に行うことにより周南市全域でのブルーカーボン生態系の維持及び拡大が図られ、気候変動緩和の一助として貢献が期待される。</p>
クレジット取得理由	大島干潟や戸田地区におけるブルーカーボンを拡大・維持していくためには、ドローンや船舶でのモニタリング調査、環境学習の一環としての播種作業（花枝採取や種子選別等）等を継続して行っていく必要があり、そのための予算の確保が重要である。
クレジット取得後の計画や見通し	Jブルークレジットによって得られた資金については、上記の大島干潟や戸田地区のブルーカーボンを拡大・維持するための活動資金として活用していく予定である。
申請対象期間に実施した活動の概要	<p>大島干潟では、定期的な保全活動を月1～2回継続実施し、主な活動内容はアサリを食害から守る被覆網のメンテナンス、アサリの間引き、アサリ種苗からの中間育成試験、カキの養殖試験、干潟清掃活動を実施し、更にはアマモの種子採取・播種によりアマモ場やコアマモ場の維持・増大に努めた。また、保全活動に加え、小学生を対象とした環境学習会として、アサリやカキの育成勉強会や干潟の生き物観察会を計3回実施した。</p> <p>戸田地区では、定期的な保全活動を月1～2回継続実施し、主な活動内容はアサリを食害から守る被覆網のメンテナンス、アサリの間引き、アサリ種苗からの中間育成試験、干潟清掃活動を実施し、更にはアマモの種子採取によりアマモ場やコアマモ場の維持・増大に努めた。</p> <p>※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp38</p>
プロジェクト実施開始日	平成29年度～現在

項目1	①対象生態系面積の算定方法	<p>【生態系】海草 【藻場】アマモ場 【構成種】アマモ</p>
	②クレジット認証対象期間	2023年10月06日～2024年10月05日
	③対象とする面積	<p>【面積】 8.698938 (ha) 【面積の算定根拠】 大島干潟のアマモ場について、以下の手法で藻場の範囲と被度を推定。 ・空中ドローンによる写真撮影 ・GPS付魚群探知機による縁辺部の把握 ・水中カメラ等による被度の把握 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp3～p12 【面積の資料】 添付ファイルなし</p>
	④吸収係数	<p>【単位面積あたりの湿重量】 42.6 【単位面積あたりの湿重量の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32～p33 【単位面積あたりの湿重量に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【含水率】 87(%) 【含水率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【含水率に関する資料】 添付ファイルなし</p>

<p>項目1</p>	<p>④吸収係数</p>	<p>【P/B比】 4.5 【P/B比の算定根拠】 平成24年度地球温暖化対策推進費のうち「藻場・干潟の炭素吸収源評価と吸収機能向上技術の開発」委託事業報告書の文献値参照 【P/B比に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【炭素含有率】 32(%) 【炭素含有率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【炭素含有率に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率1】 0.162 【残存率1の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【残存率1に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率2】 0.0181 【残存率2の算定根拠】 文献値（「港湾空港技術研究所 未発表資料」）を参照 【残存率2に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【生態系全体への変換係数】 2.12 【生態系全体への変換係数の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【生態系全体への変換係数に関する資料】 添付ファイルなし</p>
------------	--------------	--

項目1	⑤吸収量算定方法	<p>【計算に利用した式】 式2</p> <p>【算定結果（吸収量）】 97.118(t-CO2)</p>
	⑥确实性の評価	<p>【対象生態系面積等の評価】 95%</p> <p>(面積：8.698938(ha)×評価：95%)</p> <p>【吸収係数の評価】 97%</p> <p>(吸収係数：11.1644×評価：97%)</p>
	⑦調査時に使用した船舶の情報	<p>【船舶の種類】 船外機船 (11kW / 15PS 程度)</p> <p>【台数】 1隻</p> <p>【稼働時間】 3.00(h)</p> <p>【出力】 11.00(kW)</p> <p>【燃料の種類】 ガソリン</p> <p>【CO2排出量】 0.016(t-CO2)</p>

項目1	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【CO2吸収量】 0(t-CO2)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 大島干潟造成前をベースラインとして設定する。干潟造成前は、地元漁業者により現地においてアマモの生育繁茂は確認されていないため、ベースラインをゼロとする。</p> <p>【資料】 添付ファイルなし</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	89.478(t-CO2)

項目2	①対象生態系面積の算定方法	<p>【生態系】海草 【藻場】アマモ場 【構成種】コアマモ</p>
	②クレジット認証対象期間	2023年10月06日～2024年10月05日
	③対象とする面積	<p>【面積】 2.851013(ha) 【面積の算定根拠】 大島干潟のコアマモ場について、以下の手法で藻場の範囲と被度を推定。 ・空中ドローンによる写真撮影 ・カメラによる被度の把握 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp13～15 【面積の資料】 添付ファイルなし</p>
	④吸収係数	<p>【単位面積あたりの湿重量】 8.89 【単位面積あたりの湿重量の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、コアマモの粹取り（50cm×50cm）を被度100%の1か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32～p33 【単位面積あたりの湿重量に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【含水率】 90(%) 【含水率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、コアマモの粹取り（50cm×50cm）を被度100%の1か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【含水率に関する資料】 添付ファイルなし</p>

<p>項目2</p>	<p>④吸収係数</p>	<p>【P/B比】 4.5 【P/B比の算定根拠】 アマモ場と同じとした。平成24年度地球温暖化対策推進費のうち「藻場・干潟の炭素吸収源評価と吸収機能向上技術の開発」委託事業報告書の文献値参照 【P/B比に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【炭素含有率】 32.5(%) 【炭素含有率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、コアマモの粹取り（50cm×50cm）を被度100%の1か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【炭素含有率に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率1】 0.162 【残存率1の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【残存率1に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率2】 0.0181 【残存率2の算定根拠】 文献値（「港湾空港技術研究所 未発表資料」）を参照 【残存率2に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【生態系全体への変換係数】 2.12 【生態系全体への変換係数の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【生態系全体への変換係数に関する資料】 添付ファイルなし</p>
------------	--------------	---

項目2	⑤吸収量算定方法	<p>【計算に利用した式】 式2</p> <p>【算定結果（吸収量）】 5.189(t-CO2)</p>
	⑥确实性の評価	<p>【対象生態系面積等の評価】 95%</p> <p>(面積：2.851013(ha)×評価：95%)</p> <p>【吸収係数の評価】 87%</p> <p>(吸収係数：1.8202×評価：87%)</p>
	⑦調査時に使用した船舶の情報	船舶使用なし

項目2	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【CO2吸収量】 0(t-CO2)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 大島干潟造成前をベースラインとして設定する。干潟造成前は、地元漁業者により現地においてコアマモの生育繁茂は確認されていないため、ベースラインをゼロとする。</p> <p>【資料】 添付ファイルなし</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	4.289(t-CO2)

項目3	①対象生態系面積の算定方法	<p>【生態系】海草 【藻場】アマモ場 【構成種】アマモ</p>
	②クレジット認証対象期間	2023年10月06日～2024年10月05日
	③対象とする面積	<p>【面積】 0.025225 (ha) 【面積の算定根拠】 沖山地区において以下の手法で藻場の範囲と被度を推定。 ・空中ドローンによる写真撮影 ・GPS付魚群探知機による縁辺部の把握 ・水中カメラによる被度の把握 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp16～p19 【面積の資料】 添付ファイルなし</p>
	④吸収係数	<p>【単位面積あたりの湿重量】 42.6 【単位面積あたりの湿重量の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32～p33 【単位面積あたりの湿重量に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【含水率】 87(%) 【含水率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【含水率に関する資料】 添付ファイルなし</p>

<p>項目3</p>	<p>④吸収係数</p>	<p>【P/B比】 4.5 【P/B比の算定根拠】 平成24年度地球温暖化対策推進費のうち「藻場・干潟の炭素吸収源評価と吸収機能向上技術の開発」委託事業報告書の文献値参照 【P/B比に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【炭素含有率】 32(%) 【炭素含有率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【炭素含有率に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率1】 0.162 【残存率1の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【残存率1に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率2】 0.0181 【残存率2の算定根拠】 文献値（「港湾空港技術研究所 未発表資料」）を参照 【残存率2に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【生態系全体への変換係数】 2.12 【生態系全体への変換係数の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【生態系全体への変換係数に関する資料】 添付ファイルなし</p>
------------	--------------	--

項目3	⑤吸収量算定方法	【計算に利用した式】 式2 【算定結果（吸収量）】 0.281(t-CO2)
	⑥确实性の評価	【対象生態系面積等の評価】 95% (面積：0.025225(ha)×評価：95%) 【吸収係数の評価】 97% (吸収係数：11.1644×評価：97%)
	⑦調査時に使用した船舶の情報	船舶使用なし

項目3	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【CO2吸収量】 0(t-CO2)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 【沖山のベースラインの修正案】 沖山地区では、元々アマモが分布していたが、平成11～4年度ごろには消滅したとされている（環境庁 第4回及び5回自然環境保全基礎調査）。また、禁漁区を設定していない沖山の周辺エリアでは、現在、アマモは分布していないことを確認している。以上のことから、ベースラインはゼロとする。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp17を参照。</p> <p>【資料】 添付ファイルなし</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	0.259(t-CO2)

項目4	①対象生態系面積の算定方法	<p>【生態系】海草 【藻場】アマモ場 【構成種】アマモ</p>
	②クレジット認証対象期間	2023年10月06日～2024年10月05日
	③対象とする面積	<p>【面積】 0.126788 (ha) 【面積の算定根拠】 戸田地区の津木漁港のアマモ場について、以下の手法で藻場の範囲と被度を推定。 ・空中ドローンによる写真撮影 ・水中カメラによる被度の把握 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp20～p21 【面積の資料】 添付ファイルなし</p>
	④吸収係数	<p>【単位面積あたりの湿重量】 42.6 【単位面積あたりの湿重量の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32～p33 【単位面積あたりの湿重量に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【含水率】 87(%) 【含水率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【含水率に関する資料】 添付ファイルなし</p>

<p>項目4</p>	<p>④吸収係数</p>	<p>【P/B比】 4.5 【P/B比の算定根拠】 平成24年度地球温暖化対策推進費のうち「藻場・干潟の炭素吸収源評価と吸収機能向上技術の開発」委託事業報告書の文献値参照 【P/B比に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【炭素含有率】 32(%) 【炭素含有率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、アマモの枠取り（50cm×50cm）を被度50%及び被度100%の2か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【炭素含有率に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率1】 0.162 【残存率1の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【残存率1に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率2】 0.0181 【残存率2の算定根拠】 文献値（「港湾空港技術研究所 未発表資料」）を参照 【残存率2に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【生態系全体への変換係数】 2.12 【生態系全体への変換係数の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【生態系全体への変換係数に関する資料】 添付ファイルなし</p>
------------	--------------	--

項目4	⑤吸収量算定方法	【計算に利用した式】 式2 【算定結果（吸収量）】 1.415(t-CO2)
	⑥确实性の評価	【対象生態系面積等の評価】 95% (面積：0.126788(ha)×評価：95%) 【吸収係数の評価】 97% (吸収係数：11.1644×評価：97%)
	⑦調査時に使用した船舶の情報	船舶使用なし

項目4	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【CO2吸収量】 0(t-CO2)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 津木漁港では岸側にガラモ場が分布していたが、アマモ場は確認されていない（第5回自然環境保全基礎調査）。また、アマモ場保全ため津木漁港の一部を禁漁区としているが、禁漁区を設定していない周辺エリアは、現在 アマモは分布していないことを確認している。以上のことから、ベースラインはゼロとする。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp22 【資料】 添付ファイルなし</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	1.304(t-CO2)

項目5	①対象生態系面積の算定方法	<p>【生態系】海草 【藻場】アマモ場 【構成種】コアマモ</p>
	②クレジット認証対象期間	2023年10月06日～2024年10月05日
	③対象とする面積	<p>【面積】 0.049525(ha) 【面積の算定根拠】 戸田地区の西津木干潟のコアマモについて、以下の手法で藻場の範囲と被度を推定。・空中ドローンによる写真撮影 ・水中カメラによる被度の把握 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp23～p24 【面積の資料】 添付ファイルなし</p>
	④吸収係数	<p>【単位面積あたりの湿重量】 8.89 【単位面積あたりの湿重量の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、コアマモの粹取り（50cm×50cm）を被度100%の1か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32～p33 【単位面積あたりの湿重量に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【含水率】 90(%) 【含水率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、コアマモの粹取り（50cm×50cm）を被度100%の1か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【含水率に関する資料】 添付ファイルなし</p>

<p>項目5</p>	<p>④吸収係数</p>	<p>【P/B比】 4.5 【P/B比の算定根拠】 アマモ場と同じとした。平成24年度地球温暖化対策推進費のうち「藻場・干潟の炭素吸収源評価と吸収機能向上技術の開発」委託事業報告書の文献値参照 【P/B比に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【炭素含有率】 32.5(%) 【炭素含有率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、コアマモの粹取り（50cm×50cm）を被度100%の1か所で行い、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【炭素含有率に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率1】 0.162 【残存率1の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【残存率1に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率2】 0.0181 【残存率2の算定根拠】 文献値（「港湾空港技術研究所 未発表資料」）を参照 【残存率2に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【生態系全体への変換係数】 2.12 【生態系全体への変換係数の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【生態系全体への変換係数に関する資料】 添付ファイルなし</p>
------------	--------------	---

項目5	⑤吸収量算定方法	<p>【計算に利用した式】 式2</p> <p>【算定結果（吸収量）】 0.09(t-CO2)</p>
	⑥确实性の評価	<p>【対象生態系面積等の評価】 95%</p> <p>(面積：0.049525(ha)×評価：95%)</p> <p>【吸収係数の評価】 87%</p> <p>(吸収係数：1.8202×評価：87%)</p>
	⑦調査時に使用した船舶の情報	船舶使用なし

項目5	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【CO2吸収量】 0(t-CO2)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 西津木干潟においては、過去の文献（環境庁 第4 回及び5回自然環境保全基礎調査）によると、アマモ場・コアマモ場は確認されていない。また、西津木干潟内のアサリ被覆網を実施しているコアマモの非保全区ではコアマモは確認されていない。以上のことから、ベースラインはゼロとする。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp22</p> <p>【資料】 添付ファイルなし</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	0.074(t-CO2)

項目6	①対象生態系面積の算定方法	<p>【生態系】 海藻 【藻場】 ガラモ場 【構成種】 その他</p>
	②クレジット認証対象期間	2023年10月06日～2024年10月05日
	③対象とする面積	<p>【面積】 0.082163 (ha) 【面積の算定根拠】 大島干潟潜堤部のガラモ場について、以下の手法で藻場の範囲と被度を推定。 ・潜堤部での空中ドローンで写真撮影 ・目視観察による分布範囲の把握 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp25～p30 【面積の資料】 添付ファイルなし</p>
	④吸収係数	<p>【単位面積あたりの湿重量】 114.4 【単位面積あたりの湿重量の算定根拠】 Jブルークレジットの手引기에示された被度階級(X: 1~5) と湿重量(Y)の関係式から推定した。$Y=0.0279\exp(1.2032X)$ ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp33 【単位面積あたりの湿重量に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【含水率】 90(%) 【含水率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、ガラモの主構成種であるウミトラノオ、ノコギリモクを採取し、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【含水率に関する資料】 添付ファイルなし</p>

<p>項目6</p>	<p>④吸収係数</p>	<p>【P/B比】 1.4 【P/B比の算定根拠】 P/B比は、文献2ではホンダワラの平均P/B比として1.4が示されている。なお、ガラモ場のP/B比は、1.0～1.9の範囲（ほとんどの事例で1.0～1.5）と言われている。以上を踏まえて、ガラモ場のP/B比は、文献3の値を用いることとし1.4と設定した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp34 【P/B比に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【炭素含有率】 36.1(%) 【炭素含有率の算定根拠】 2023年5月20日に大島干潟で、ガラモの主構成種であるウミトラノオ、ノコギリモクを採取し、炭素含量、湿重量、乾燥重量等を分析した。 ※詳細：JBクレジット申請添付資料_R6のp32 【炭素含有率に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率1】 0.0472 【残存率1の算定根拠】 文献値（「Krause-Jensen & Duarte, 2016, Substantial role of macroalgae in marine carbon sequestration, Nature Geoscience」）を参照 【残存率1に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【残存率2】 0.0499 【残存率2の算定根拠】 文献値（「港湾空港技術研究所 未発表資料」）を参照 【残存率2に関する資料】 添付ファイルなし</p> <p>【生態系全体への変換係数】 1.5 【生態系全体への変換係数の算定根拠】 文献値（「浅海域における年間二酸化炭素吸収量の全国推計」）を参照 【生態系全体への変換係数に関する資料】 添付ファイルなし</p>
------------	--------------	--

項目6	⑤吸収量算定方法	<p>【計算に利用した式】 式2</p> <p>【算定結果（吸収量）】 0.253(t-CO2)</p>
	⑥确实性の評価	<p>【対象生態系面積等の評価】 90%</p> <p>(面積：0.082163(ha)×評価：90%)</p> <p>【吸収係数の評価】 87%</p> <p>(吸収係数：3.08776×評価：87%)</p>
	⑦調査時に使用した船舶の情報	船舶使用なし

項目6	⑧ベースラインの設定方法 妥当性とその量	<p>【CO2吸収量】 0(t-CO2)</p> <p>(入力値0)</p> <p>【設定した根拠】 大島干潟造成前をベースラインとして設定する。干潟造成によって潜堤が設置されたことから、ベースラインをゼロとする。</p> <p>【資料】 添付ファイルなし</p>
	⑨クレジット認証対象の 吸収量	0.198(t-CO2)

合計のクレジット認証対象の吸収量	95.6 t
------------------	--------